

## 改造社版『魯迅全集』をめぐる井上紅梅の評価について

勝山 稔

### 一 問題の所在

一九三二年十一月、現在一般に通用している『魯迅全集』が刊行される以前に、魯迅の小説集を日本語に翻訳した『魯迅全集』なる書籍<sup>[1]</sup>が改造社から刊行された。(以下、混用を避けるため、改造社版『魯迅全集』とする)

改造社版『魯迅全集』刊行以前、魯迅の翻訳は何れも小規模な試みに過ぎず、本書の登場は、魯迅に関する日本初の本格的翻訳集として脚光を浴びた。しかし、原作者である魯迅のコメントは「実にひどいやりかただ」と酷評に近く、改造社版『魯迅全集』の翻訳者である井上紅梅は、「魯迅にののしられ」<sup>[2]</sup>た人物と論評されたこともあり、斯界では紅梅の著作を学問的な俎上に載せること自体半ば禁忌とさえなっている観がある。

ところが、魯迅から酷評を受けた改造社版『魯迅全集』の翻訳水準について検討を試みると、意外な事実が分かってきた。それは改造社版『魯迅全集』と、ほぼ同時期に発表され魯迅から手厚い指導を受けた増田渉の翻訳とを比べても、翻訳に問題がある事例の差は予想以上に少なく、受容史の観点から見れば、先行翻訳が皆無に近い劣悪な状況で増田の翻訳より数倍にも及ぶ規模の翻訳を行った点は、寧ろ肯定的な評価も十分に成り立つ事が判明したのである<sup>[3]</sup>。

また、近代日本に於ける中国文化の受容の観点から検討したところ、当時最大規模の明代白話小説集『今古奇観』の翻訳を刊行し<sup>[4]</sup>、他にも『金瓶梅』『儒林外史』の翻訳も確認されるなど、中国小説の受容におけるパイオニアとして多大な貢献をしている事実が次々と明らかになってきた。

井上紅梅が如上の業績を残しながらも、なぜ斯界で酷評されていたのか。筆者はこの疑問に取り組むべく、彼の評価を決定づけた改造社版『魯迅全集』における酷評の経緯について検討<sup>[5]</sup>を試みてきた。その結果、魯迅が指摘した酷評の根拠自体、妥当性にやや欠

ける面が見られるばかりでなく、魯迅による激しい批判も、ほぼ特定の一個人の書簡の中で集中的に書かれていることが判明し、その特定の人物——増田 渉 という存在が、魯迅による改造社版『魯迅全集』の評価に何らかの影響を及ぼしている可能性が浮かんできたのである。

井上紅梅に関する先行研究は、三石善吉氏によるシナ通に関する考察<sup>[6]</sup>や、周国偉氏による魯迅の立場からの考察<sup>[7]</sup>、そして符麗紅・三宝政美両氏による紅梅の著作全般に関する考察<sup>[8]</sup>などが見られる。また小論で取り上げる内容については丸山昇氏の考察<sup>[9]</sup>があるものの、丸山氏の論考は、紅梅の翻訳よりも、その収録雑誌の性格を述べるに過ぎず、紅梅の評価についても、基本的に三石善吉氏の考察に基づいている。これらの先行研究は、何れも魯迅が下した評価に従って論を展開しており、改造社版『魯迅全集』の酷評に対して批判的な立場から内容を検討したものは、今まで存在しなかった。

以下小論では、改造社版『魯迅全集』刊行当時の魯迅と増田渉の關係に注目しつつ、紅梅がかかる評価を受けるに至った経緯について検証を試みたい。

なお本論では、魯迅と増田渉の關係について論及するが、改造社版『魯迅全集』の評価に関わる考察に限定し、紙幅の都合上、他の論点は割愛したことを予めご了承いただきたい。

## 二 改造社版『魯迅全集』に関する魯迅の評価

### 1 一貫しない魯迅の評価と言動

本論で取り上げる改造社版『魯迅全集』は、一般的に使用されている人民文学出版社の『魯迅全集』とは異なり、『呐喊』『彷徨』等の魯迅の小説集を翻訳した単著にすぎない。

しかし改造社版『魯迅全集』刊行以前、魯迅作品の翻訳は極めて少なく、例えば『大調和』掲載の無名氏による「故郷」の翻訳<sup>[10]</sup>を始め、松浦珪三<sup>[11]</sup>の「阿Q正伝」「狂人日記」「孔乙己」や、山上正義（王守仁）<sup>[12]</sup>の「阿Q正伝」、そして佐藤春夫による「故郷」<sup>[13]</sup>や、増田渉<sup>[14]</sup>による「家鴨の悲劇」と「風波」の翻訳の試みが見られるものの、これらを全て合計しても六篇が確認できるに過ぎなかった。

その一方、改造社版『魯迅全集』は、合計二六篇もの魯迅の小説を擁し、日本に於ける当時最大規模の翻訳集であったことは間違いない。しかし、原作者である魯迅の評価は非常に厳しかった。この魯迅のコメントについて、『魯迅全集』所収一九三二年一二月一九日付増田渉宛の魯迅書簡<sup>[15]</sup>の全文を掲載すると、左記の通りである。

拝啓 十日の御手紙は今日拝見しました、質問をば今に送帰します。

「ユーモア」の部数は実に余り少ないです、時は不景気で人々はもう「ユーモア」などを読む暇を持たないためだろーと思います。

僕は母親の病気のために先月一度北京に行きました、二週間立つと病気が直りましたから又上海へもどりました、スチームはもう通って居ますが併し天気は未だそう寒くない。秋からは小供が時々病気にかかって困りました。今にもなお薬をのまして居ます。腸カタルが慢性になったらしい。今の住居は空気はそう悪くないが太陽が這入らないから大変よくないと思います。来年少しくあたたかくなったら転居でもしよーかと思って居ます。

井上氏訳の『魯迅全集』が出版して上海に到着しました、訳者からも僕に一冊くれました、ちょっと開けて見ると其誤訳の多に驚きました。あなたと佐藤先生の訳したものを対照しなかったらしい、実にひどいやりかただと思います。

御家族一同の幸福を祈ります。 草々頓首

魯迅 上 十二月十九夜

書簡の前半部分では、増田渉が当時翻訳を手掛けていた『世界ユーモア全集』<sup>[16]</sup>の話題から始まり、魯迅の北京訪問や子供の病気、そして上海での居住環境など身辺の話題が続いているが、段落がかわって改造社版『魯迅全集』に話題となると、俄に激しい不満をあらわにしているのが理解できる。ここで魯迅は改造社版『魯迅全集』を見て、誤訳が多く、増田渉と佐藤春夫の訳と対照していないことを根拠にあげて「実にひどいやりかただ」と紅梅を激しく非難していることが理解できよう。

しかし魯迅のコメントについては、幾つかの不自然な点があげられる。

増田渉の言<sup>[17]</sup>によれば、魯迅は愛憎の情が激しく自己の感情を露骨に表す性癖で知られ、例えば知人の日本人作家に中国語訳化の話が持ち上がった際、「訳者に問題あり」と計画を中止させた過去<sup>[18]</sup>を持つ。しかし、井上紅梅に対しては直接抗議や翻訳発表の中止を表明した記録は管見に於いて残されていない<sup>[19]</sup>。そればかりか、改造社版『魯迅全集』の際には、魯迅自ら紅梅のために「阿Q正伝」中に見える賭博（骨牌）の説明文を書いて送り<sup>[20]</sup>、「魯迅年譜」の作成にあたっても増田渉の「魯迅伝」及び佐藤春夫訳「故郷」の後記「原作者に関する小記」を参照するようにアドバイス<sup>[21]</sup>しているほか、紅梅の求めに応じて紅梅と会見し<sup>[22]</sup>、改造社の月刊誌『文芸』の編集や雑誌の寄稿依頼を受けている。また会談後に書かれた書簡にも「井上紅梅様が上海へ来ました。もう頗る酒を飲ん

でるようです」<sup>[23]</sup>とあるように、少なくとも紅梅に対する敵意が殆ど感じられない。

また「ひどいやりかた」で『魯迅全集』を刊行した出版社・改造社に至っては明確な好意さえも抱いていた。例えば魯迅は一九三三年から三六年にかけて改造社の雑誌である『改造』と『文芸』に合計六回<sup>[24]</sup>にわたって寄稿している。竹内好氏は、その集中的に寄稿した点に注目し「改造社と執筆関係の出来たことが大きないとぐちになっていた」<sup>[25]</sup>と推測するが、その糸口は、他でもない紅梅の改造社版『魯迅全集』であったのだ。例えば三六年二月一五日蔡元培宛魯迅書簡には、

日友山本君は早くに東京に改造社を立て、雑誌を編印、図書を出版、文化に力を尽くして多年を歴ました。以前に拙作の翻訳書を出版、それで知りました（日友山本君早在東京立改造社、編刊雑誌、印行図籍、致力文術、縣歴多年。因曾訳印拙作小説、故与相識。）

とあるように、魯迅が改造社と初めて関係を持ち、急速に接近する契機を生み出したのは、「訳印拙作小説（拙作の翻訳書を出版）」つまり改造社版『魯迅全集』の出版が契機となったと彼自らが告白し、改造社の山本社長を「日友」——日本の友人とまで表現しているのである。

一方で改造社版『魯迅全集』を激しく非難しながら、その一方で紅梅に対しては殆ど敵愾心が見えず、『魯迅全集』を刊行した改造社に至っては、社長を「友人」と称し好意さえ抱いている。この魯迅の相矛盾する態度は何を意味するのか。

これについて魯迅による批判の経緯を詳細に検討した結果、改造社版『魯迅全集』に対する批判は、全て魯迅の書簡に書き記されていること、そしてその書簡の宛先が、増田涉という特定の人物に向けて集中的に行われていることが判明した。そのため魯迅による改造社版『魯迅全集』の評価形成の背景には、この増田涉という存在が何らかの鍵を握っている可能性が推測されるのである。

## 2 増田涉と魯迅

周知の事ではあるが、増田涉は島根大学・大阪市立大学・関西大学で教鞭を執った中国小説研究の専門家で、魯迅との関わりについては、魯迅と増田涉との間で交わされた往復書簡集『魯迅増田涉師弟答問集』<sup>[26]</sup>など幾つかの先行研究が存在する。

ここでは増田渉による回想録『魯迅の印象』<sup>[27]</sup>を中心に、まず彼と魯迅の関係を踏まえた上で、増田、或いは増田と魯迅が、改造社版『魯迅全集』と如何なる関係にあったのか分析を試みたい。

彼は、一九〇三年島根県八束郡恵曇村片句（現松江市鹿島町片句）に生まれ、旧制松江中学・旧制松江高校を経て東京帝国大学文学部に入学。その後、当時支那文学愛好者として活躍していた佐藤春夫に師事し、春夫から中国小説関連の翻訳の斡旋を受け、『世界ユーマ全集』や、『平妖伝』<sup>[28]</sup>の翻訳を手掛ける傍ら、彼は上海への遊学を思い立っている。

増田自身、その目的は「中国のことをやっているのだから、一度どんなところか、自分の目でじかに見てみようという、その程度の漠然とした気持ち」<sup>[29]</sup>であったが、出立に先立ち春夫は彼を魯迅に面会させるべく、内山完造への紹介状を増田に托している。増田は一九三一年三月に上海へ到着、程なく彼は「内山書店を訪ねたら、丁度魯迅が上海にいる。しかも毎日同書店にあらわれると聞いた」<sup>[30]</sup>という。

勇躍した増田は、その後魯迅が内山書店に訪れる時間を見計らって出かけ、『朝花夕拾』や『野草』について質問する毎日を送っていたが、話題が『中国小説史略』になると、魯迅宅に直接出かけるようになる。増田は学生時代から『中国小説史略』を「中国小説史の画時代的名著」<sup>[31]</sup>と感銘を持ち、紹介者内山完造の薦めもあり、当初から翻訳を目的として「殆ど一字一句講釈してもらった」<sup>[32]</sup>という。こうして増田は著者である魯迅自身から『朝花夕拾』『野草』『中国小説史略』『呐喊』『彷徨』について直接解説を受けることとなった。

その後、増田は上海滞在中から「魯迅伝」を執筆<sup>[33]</sup>、帰国後に増田と佐藤春夫は、その掲載に奔走することとなる。

当時の日本において魯迅は中国における「小説壇の元老」<sup>[34]</sup>と認識されていたものの、社会的な関心は極めて薄かった。増田が上海に滞在中、佐藤春夫は「これほどまで喧伝されている隣邦の世界的作家に就いて、余りにも日本の読書界が無関心」<sup>[35]</sup>と、『中央公論』誌上で「故郷」の翻訳を発表したところ、雑誌『新潮』の文芸欄では「一般的に、こんな翻訳に興味を寄せたり、関心を持ったりする人々が、どれくらいあるだろう」<sup>[36]</sup>と揶揄された程であった<sup>[37]</sup>。

そのため三宝政美氏の考察によれば「春夫は早速この原稿を『改造』、『中央公論』にまわしたが、取り上げようとしない。業を煮やした春夫は、そこで改造社社長の山本実彦に直々送りつけて掲載許可を勝ちとってくれた。『未曾有の努力をした』と春夫自身が語るほどの奮闘振りであった。」<sup>[38]</sup>とある通り、二人は苦心惨憺の末『改造』三二年四月号に

発表<sup>[39]</sup> させることに成功したのである<sup>[40]</sup>。

増田渉の「魯迅伝」は、日本で初めて魯迅の実像を知りうる貴重なレポートであるとともに、全国規模の著名雑誌である『改造』に掲載されたことも手伝い、魯迅に対する関心が、日本でもようやく高まりを見せ始めていた。

そのため増田は、魯迅による指導をもとに魯迅作品の翻訳を開始したが、まだ「家鴨の喜劇」<sup>[41]</sup>「風波」<sup>[42]</sup>の僅か二篇が公開されたばかりの段階——その後に刊行される「阿Q正伝」「幸福な家族」<sup>[43]</sup>や、佐藤春夫との共訳による『魯迅選集』等の刊行がまだ世に生まれるより先に——井上紅梅による改造社版『魯迅全集』が刊行されたのである。

### 三 魯迅による評価形成の経緯

魯迅の書簡の中で、改造社版『魯迅全集』の出版に関する言及が見えるのは、魯迅が改造社版『魯迅全集』を入手する二ヶ月前にあたる三二年一〇月二日付の増田渉宛書簡<sup>[44]</sup>が最初である。そこでは「私の小説全部が井上紅梅氏に訳されて十月中改造社から出版する」と要件のみを一報しているに過ぎないが、その五日後に、魯迅は『改造』三二年一一月号の裏表紙に印刷された『魯迅全集』の広告を見て愕然としたと増田に報告している。以下、増田渉宛の三二年一一月七日付書簡によると、

井上紅梅氏に拙作が訳された事は僕にも意外の感がしました。①同氏と僕とは道がちがいます。併し訳すというのだから仕方ありません。②先日、同氏の『酒・阿片・麻雀』という本を見たら、も一一層慨嘆しました。……③今日『改造』に出た広告をも拝見しましたが作者は非常にえらく書かれて居ります、これも、慨嘆すべき事です。④つまりあなたの書いた『某伝』は広告のつとめとなりました、世の中はどんなに妙な事でしょう。⑤僕は『小説史略』もあぶないと思う。

とある。書簡の内容を確認すると、まず魯迅は紅梅とは「道がちがう」と指摘（傍線部①）、その後、（恐らく一〇月二日以降に）紅梅の著書『酒・阿片・麻雀』を読み、その内容に衝撃を受け「同氏と僕とは道がちがう」と慨嘆の感を新たにしたりとある（傍線部②）。また魯迅は慨嘆した理由に『改造』の広告による誇張を取り上げ（傍線部③）、増田の「魯迅伝」が結果的に改造社版『魯迅全集』の広告の役目を果たしてしまったと言い（傍線部④）、紅梅による翻訳が『中国小説史略』に及ぶことを危惧している（傍線部⑤）。

つまり魯迅から見れば、(1) 紅梅の著書『酒・阿片・麻雀』を根拠に紅梅は「道がちがう」人物であると判断、そして(2) 増田による「魯迅伝」の発表から僅か半年後に過ぎない紅梅訳の突然の刊行は、増田の「魯迅伝」に便乗した出版であること、(3) 今後増田によって行われるべき魯迅作品の翻訳の功績を横取りしかねない人物ではないかと増田に告げているのであるが、魯迅のこの認識は果たして妥当なものであるのか。以下、魯迅の指摘した三点について詳しく検討を試みたい。

## 1 魯迅による「道がちがう」について

なぜ魯迅は紅梅と「道がちがう」と感じたのか。この問題について三石善吉氏は、魯迅がシナ通<sup>[45]</sup>としての「紅梅の生き方」に違和感を覚えたのではないかと指摘している。それによると、

魯迅の念頭には『酒、阿片、麻雀』の作者・紅梅と『魯迅全集』の訳者・紅梅とがあり、……そのような人に訳されたのは「一層慨嘆」にたえぬ、と紅梅の生きる姿勢そのものを問題にしている。

しかし、少なくとも紅梅のその作品は、日本の私小説の伝統を守った、傑作とまではいわぬまでも、比較的まとまった面白い作品なのである。してみると魯迅が問題にした点は、①紅梅が好んで暗黒面を書くその執筆の精神、②作品にうかがわれる一種の退廃ムードと全編からにじみでている中国蔑視のトーン、③その作品の中心の一つである中国婦人との結婚の経緯——とくに「支那風俗研究上幾分でも手助け」になるという理由で結婚した、その動機の不純性、——等々をその作品から読みとったからだと思われるのである。魯迅はそのような紅梅の生き方を「僕とは道がちがい」と表現したのではあるまいか。……いや、さらに端的にいえば、紅梅の「支那風俗研究」そのものが、当時の魯迅、中国にとって「迷惑」だったということである。<sup>[46]</sup>

とある。このように三石氏は紅梅の執筆精神や中国蔑視のトーン、そして中国婦人との結婚動機の不純性という三点を根拠として、魯迅はそのような「紅梅の生き方」に道がちがうと感じ、紅梅に対して「一層慨嘆」したのではと推察している。

また魯迅が読んだ『酒・阿片・麻雀』は、表題にある中国の悪弊に焦点を据え、紅梅の実体験を交えながら中国人の日常生活を記した通俗的な随筆で、シナ通としての彼の代表作と目されている著作である。魯迅の場合は『酒・阿片・麻雀』という一つのサンプルか

ら紅梅全体の執筆姿勢を推測し「道がちがう」と判断している。三石氏と魯迅の二人は、判断に至るまでの過程は異なるものの、両者による理解は「紅梅＝シナ通」という点では一致している。

しかし、この三石氏と魯迅による紅梅の理解は、誤解とまでは言い切れぬが、少なくとも当時の紅梅の実像を正確に把握しているとは決して言えない。

その理由を、井上紅梅の略歴から説明しよう。

井上紅梅（本名・井上進）は、一八八一年の東京生まれ。家業を継ぐべく東京高等商業学校（現一橋大学）に入学したが、父の急死に伴い上海へ渡航、自ら支那風俗研究会を立ち上げ、一九一八年四月に雑誌『支那風俗』<sup>[47]</sup>を創刊、以後上海や南京、蘇州、東京などを活躍の舞台としながら、三〇年近く中国関係の旺盛な著作活動を行っている。

彼の業績を大きく分けると、『支那風俗』や『支那女研究香艷録』（一九二一）<sup>[48]</sup>、『匪徒（土匪研究）』（一九二三）<sup>[49]</sup>、『支那各地風俗叢談』（一九二四）<sup>[50]</sup>、等の中国風俗を分析紹介した著作、そして『支那ニ浸ル人』（一九二四）、『紅い土と緑い雀』<sup>あお</sup>（一九二六）、『酒・阿片・麻雀』（一九三〇）、『中華万華鏡』（一九三八）<sup>[51]</sup>をはじめとした紅梅自身の実体験に基づく中国生活に関する著述という二種類があり、いずれも彼のシナ通としての業績として挙げられるとともに、紅梅の代表作と認識されている。三石氏はこれらの業績を根拠に、魯迅はこの中の『酒・阿片・麻雀』から紅梅をシナ通と判断した。

しかし、実際の紅梅はこれにとどまらなかった。近年の筆者による調査によると、紅梅は石田幹之助・塩谷温・安岡正篤・仁井田陞らと名を連ねて東亜研究会講座<sup>[52]</sup>を執筆し、白鳥庫吉・和田清・加藤繁・青木正児らと共に創元社の『アジア問題講座』<sup>[53]</sup>へ寄稿する一方、当時の魯迅を中心とした中国新文学運動にも大きな関心を示し、胡適の「五十年来之中国文学」<sup>[54]</sup>や譚正璧の翻訳<sup>[55]</sup>を手掛けるとともに、当時日本を代表する論壇誌『改造』・『文芸』や『中央公論』に紅梅の随筆や時事報道が当時一級の知識人と肩を並べて掲載<sup>[56]</sup>されていることが明らかになってきた。そして彼の著作歴を分析すると、シナ通としての活動は概ね著述活動の前半期に多く、後者の活動は、著述活動の後半期に集中する傾向が認められるのである<sup>[57]</sup>。

また魯迅を筆頭とした当時の新文学運動に傾倒し始めた転機について、紅梅自身は一九二六年五月の張資平の小説との出会いからと述べている<sup>[58]</sup>。以後、紅梅が魯迅の小説に辿り着くまでには殆ど時間は掛からなかったと思われ、紅梅の指摘によると一九二六年には「狂人日記」を訳出、翌二七年一二月には「在酒楼上」を『上海時論』（二巻一、二号）に、二八年には「風波」「藥」「阿Q正伝」「社戯」の翻訳を発表<sup>[59]</sup>し、一九三二年の完成

まで、足かけ六年の歳月を費やして魯迅の小説集を翻訳していたことが判明している。

つまり紅梅が魯迅の翻訳に着手した年は、増田は旧制松江高校を卒業したばかりの学生であり、長期にわたった翻訳の完成を見る直前に割って入ってきたのは、寧ろ増田の「魯迅伝」であることが理解できる。

そのため「つまりあなたの書いた『某伝』は広告のつとめとなりました、世の中はどんなに妙な事でしょう。」と紅梅の翻訳を、増田の「魯迅伝」に便乗した出版として批判した魯迅の憤慨は、この点を見落とした一面的なものに過ぎないことが理解されよう。

## 2 増田渉の存在と紅梅批判との関係

それでは、なぜ魯迅は書簡の中で紅梅批判を増田に向けて送り続けたのか。これについては、筆者は魯迅が「紅梅に慨歎した」ではなく、愛弟子である増田に対する魯迅の深い愛情が、殊更に井上紅梅に対する批判に向かわせたこと。そして魯迅が「紅梅の翻訳に慨歎した」ことを必要以上に直接増田に向けて繰り返し強調することで、当時恵まれぬ境遇にあった増田の労苦を慰撫し、その後に行われる彼の翻訳を激励する目的があったのではないかと筆者は考えている。

これは斯界における衆知の事実だが、増田渉は稀代の人徳者で知られ<sup>[60]</sup>、魯迅と増田渉との親交は、内山完造からも「恰も十年旧知の如しとでも云うてよい程」<sup>[61]</sup>と指摘されている。増田の魯迅に対する敬愛<sup>[62]</sup>は言うに及ばず、彼の後輩・松枝茂夫も「魯迅が増田さんに与えた手紙を見ると、まるで増田さんが可愛くて可愛くてたまらぬ様子が目に見えるようだ。あの魯迅にしてもがそうだったのだ。その気持ちが私にはよくわかる」<sup>[63]</sup>と言及している。確かに魯迅の増田に対する愛情は並々ならぬものがあり、増田もそれを感じていた<sup>[64]</sup>。

ところが、当時の増田の境遇は決して良好とは言えなかった。帰国後もさしたる職に恵まれず<sup>[65]</sup>、渾身の意欲作だった「魯迅伝」の反応<sup>[66]</sup>も今ひとつで、春夫によれば、帰国後の彼は何ら職も得られないまま、魯迅作品の翻訳作業に専念するため「(実家の) 松江に引籠って」しまったという<sup>[67]</sup>。

そのため、魯迅も気が気でなかった。増田が担当した改造社の『世界ユーモア集（支那編）』に企画段階から様々な助言を行ったが、その原稿料の安さを聞くや魯迅は我が事のように同情<sup>[68]</sup>している一方、『中国小説史略』の翻訳も出版を引き受ける書肆が現れるかと気を揉み、必要ならば序文執筆の用意もあるとも書いている<sup>[69]</sup>。増田がこのような状態であったため、改造社版『魯迅全集』刊行の際、魯迅が真っ先に「僕は『小説史略』も

あぶないと思う」と『中国小説史略』翻訳の危険性に言及したのも、増田のかかる状況を察してのことであろう。

そのため魯迅は自身の邦訳も増田が担当すべきと考えるのは寧ろ自然の事で、実際に改造社版『魯迅全集』刊行の際、三二年一月七日付山本初枝宛書簡の中で、魯迅は「私の小説は井上紅梅氏に訳されて改造社から出版するようになりました。増田君は頗る意外にうたれたが私も頗る意外でありました。……増田君が早くやったら善いのに。」と嘆息している。まさにこれが、増田に対する魯迅の詐らざる本心であったに違いない。

要するに、改造社版『魯迅全集』の刊行自体は、魯迅にとってさしたる問題ではなかった（以後の改造社との関係確立を考慮すれば寧ろ有益であった）が、紅梅の翻訳は、偶然にも魯迅と交友を深めた増田が翻訳に取り掛かる直前に刊行されてしまった。

そのため結果的に、魯迅にとって紅梅は増田が受けるべき翻訳の功績を横取りした人物という認識が生まれ、その点に対して魯迅は批判を繰り返したのであろう。

また紅梅の翻訳の不備を強調し、先を越された改造社版『魯迅全集』の価値を低く抑えることで、その後間もなく刊行される予定であった増田の翻訳の意義を向上させる意味合いも当然あったであろうし、他の追隨者が現れる前に、いち早く増田が発表するように翻訳作業を促すという狙いも含まれよう。そして、これら「増田訳の意義」を確認し、「増田の翻訳発表を促す」という魯迅の狙いは、他の誰に対してでもない、特定の人物——増田に向けたメッセージであることが理解できる。紅梅の批判が増田渉へ集中的に書かれたのは、そのためである。

附言しておくが、確かに紅梅訳にも問題がないわけではない。紅梅の訳文については魯迅以外からも「井上訳は……かなりに硬い訳で、ことに我々には耳慣れぬ原文の文字がそのまま使用され、味わいは深いにしても平易な、何人にも親しめる訳文とは決していえなかった」<sup>[70]</sup>という批評が残されており、後発の翻訳に比べると見劣りすることを免れるものではない。

しかし、魯迅が改造社版『魯迅全集』の内容を検討する以前に、既に紅梅への評価の大部分は形成されていた可能性が高く、また如上の感情は、紅梅の誤訳を殊更強く感じさせ、増田への書簡の中では当然その誤訳が必要以上に強調されたのであろう。

なぜなら、実際に魯迅が改造社版『魯迅全集』を手にするのは一九三二年一二月であるが、これまで指摘した様々な検討内容が全て、魯迅が改造社版『魯迅全集』を繙く前に行われていたからである。

#### 四 魯迅以外の人物における紅梅の評価

このように、魯迅による紅梅の評価は妥当性に欠ける面が認められる事が明らかになってきたが、魯迅以外の人々による紅梅の評価は如何なるものであったのか。小論の最後として確認しておきたい。

まず翻訳者たる紅梅の評価を知る手掛かりとなるのは、改造社版『魯迅全集』の刊行後に企画された『大魯迅全集』<sup>[71]</sup>の翻訳事業である。『大魯迅全集』は、企画中の魯迅関係の出版が魯迅の逝去を受けて、急遽拡大・立案された出版企画で、編集顧問は茅盾・許景宋・胡風・内山完造・佐藤春夫が担当し、日本語訳の編集責任者は増田渉が選ばれた。これまでの経緯から勘案して総責任者が増田という人選は至極当然であるが、翻訳者には、佐藤春夫や松枝茂夫、山上正義、そして井上紅梅が招聘されている。言うまでもなく増田渉は、魯迅から紅梅訳を非難する書簡を集中的に受け取っていた本人である。その本人が他ならぬ井上紅梅を魯迅作品の翻訳者として招聘しているのである。

また増田は、魯迅の逝去直後の一九三六年から彼が受け取った魯迅書簡の公開を開始し<sup>[72]</sup>、『魯迅の印象』の中ではほぼ全ての魯迅書簡を公開しているが、その際、増田渉宛の三二年十一月七日付書簡の全文、及び三二年十二月一九日の書簡にある「実にひどいやりかただ」と魯迅が最も激しい批難をした箇所を、増田は削除しているのである。

この配慮は紅梅が存命中のため公開を差し控えた可能性も考えられたが、紅梅の没後（一九四九年と推定）も長期間非公開のままで<sup>[73]</sup>、増田が亡くなる七年前——紅梅の没後二〇年以上経過してようやく公開<sup>[74]</sup>されているのである。

また公開された際も、魯迅書簡の原文に増田が括弧書きで註釈を施しているが、増田の註釈は、明らかに紅梅批判の回避を意図していることがうかがえる。

例えば三二年十一月七日増田渉宛書簡には、「先日、同氏の『酒、阿片、麻雀』という本を見たら、も一一層慨嘆しました。……今日『改造』に出た広告をも拝見しましたが作者は非常にえらく書かれて居ります、これも、慨嘆すべき事です。つまりあなたの書いた『某伝』は広告のつとめとなりました、世の中はどんなに妙な事でしょう。」とあるが、増田は傍線部の下に「魯迅自身」と注記を付けている。これは前後をそのまま読むと「作者」を紅梅と判断してしまう可能性が高く、そうなると、紅梅が『魯迅全集』の翻訳者として全面広告に登場すること自体が「非常にえらく書かれて」見えたと読める。恐らく増田はこれを避けるためにコメントを加えたに相違ない<sup>[75]</sup>。

また直後の「僕は『小説史略』もあぶないと思う」にも増田は「誰かが先に訳して出版するかも知れないという意味」と注意書きを添えている。これも前後の文脈を見るに『小

『説史略』の翻訳の恐れがあるのは、井上紅梅ただ一人を指すに他ならない。それを増田は紅梅以外の第三者——「誰か」という存在を喚起させており、これら増田の行為は魯迅による紅梅批判を少しでも回避しようとしている点で一致する。単純な解説が多い増田の註釈の中で、内容の解釈に踏み込んだ記述は、ここだけしか見られない。

またシナ通を含めた紅梅自身の評価については、『大魯迅全集』の編集顧問兼翻訳者であった佐藤春夫が、紅梅に対して絶賛に近い賛辞を贈っている。春夫は随筆「曾遊南京」の中で、

この時遂に見なかつた雨花台の眺望は後年井上紅梅の著『紅い土と緑い雀』によって知つた。……現代支那の庶民の生活を窺ふにはこの上なしの一篇である。序にこの著者に敬意を表して置く。……もっと知りたいと思う読者は前述の井上氏の著作の「麻雀日記」と「夢野南京」の二文を読まれたがよいと思う。寡聞の限りでは南京の風物と生活とを描いた文献の中一番よく南京の生活と趣味とを伝えたものと思われるからである。自分の近作南京雨花台の女の雨花台の描写なども実は同書に負うものである、序に記して井上氏に感謝する。<sup>[76]</sup>

と、中国の風物や風俗を詳述する情報源として紅梅の著作の価値を高く評価し、春夫の「南京雨花台の女」自体も紅梅の記述を典拠としたことを告白し、紅梅に複数回も繰り返して「敬意」と「感謝」を表している<sup>[77]</sup>。

このように、『大魯迅全集』への翻訳者としての招聘、増田渉による魯迅の批判箇所削除、公開時の注記の追加、佐藤春夫による紅梅の著作への評価という四点から見れば、改造社版『魯迅全集』、そして翻訳者である井上紅梅に対する魯迅の評価は、必ずしも、その他の人々による井上紅梅評価と完全に一致するとは言えない。そして寧ろ第三者からは積極的に評価されている面が見られ、斯界で半ば定説と化していた魯迅の評価自体も決して絶対的なものではないことが判明するのである。

そのため魯迅の評価に基づいて形成された斯界における紅梅の評価や、魯迅のコメントによって従来学術研究の考察対象にさえ登らなかった紅梅による様々な業績についても、今一度、検討の必要が認められるのではないかと思われるのである。

筆者は、シナ通という彼の一面を否定する意図は持っていない。ただその一面を強調・固執し、紅梅の業績を全てシナ通の軽薄な所業と一括りに処理するのは余りに軽率すぎると考える。近代日本に於ける中国通俗小説受容の一面や、また中国近代小説受容のパイオニアという一面を考慮した、多面的・体系的な再検討が今後必要となるのではなかろうか。

## 五 結 論

改造社版『魯迅全集』における魯迅の評価の経緯について考察したが、本論の要旨は以下の通りである。

I 魯迅は改造社版『魯迅全集』に対して極めて厳しい評価を下したが、批判のコメントは増田渉という特定の人物に集中的に送られており、改造社版『魯迅全集』の評価形成には増田渉という存在が何らかの鍵を握っている可能性が推測される。

II 増田は上海で魯迅に親しく教えを受けた愛弟子で、帰国後魯迅を広く日本に紹介しようと「魯迅伝」を執筆したが、掲載は難航し苦心惨憺の末に漸く雑誌『改造』に掲載された。しかしその僅か半年後に紅梅の改造社版『魯迅全集』刊行が発表された。そのため紅梅訳の突然の刊行は、魯迅から見れば、増田の苦心の労作である「魯迅伝」に便乗した出版行為にほかならず、増田によって行われるべき翻訳の功績を略奪した人物に見え、その感情が紅梅の批判に結びついた。

III また当時の増田が置かれていた境遇に、魯迅は更に同情を深め、愛弟子である増田に対する深い愛情が、書簡を介して「紅梅の翻訳に慨歎した」ことを増田に強調して示すことで、恵まれぬ境遇にある彼の労苦を慰撫し、その後に行われる増田の翻訳を促す目的があったのではないかと推測される。

IV また魯迅以外の人物による紅梅の評価は悪くなく、魯迅の死後編纂された『大魯迅全集』において、責任者の増田は翻訳者として紅梅を招聘、更に魯迅書簡にある紅梅批判の箇所を削除したほか、佐藤春夫による紅梅の著作への高い評価から見れば、魯迅の評価自体も決して絶対的なものではないことが判明した。

本論は、著作の一部に学術的に検討に足る価値を有しながらも、魯迅の批判により長年日の目を見なかった井上紅梅に焦点を絞った。彼の批判の妥当性を検討したに過ぎないが、殊に近代日本に於ける中国文学の受容の面から考えれば、彼の業績の幾つかは日中文化交流のパイオニアとして真剣に再評価すべき時期に来ているのではなかろうか。

本稿は平成二一年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）「海域交流をキーワードとした中国通俗文芸の学際的研究」の交付を受けた研究成果の一部である。

---

【1】井上紅梅訳『魯迅全集』（改造社、一九三二）

【2】樽本照雄『清末小説探索』（法律文化社、一九九八）一四三頁参照。

- 【3】 拙稿「井上紅梅の研究——彼の生涯と受容史から見たその業績を中心として」『（東アジア海域叢書）小説・芸能から見た海域交流』（汲古書院、二〇一〇）参照。
- 【4】 詳細は拙稿「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について」（『国際文化研究科論集』一五号、二〇〇七）参照。
- 【5】 拙稿「改造社版『魯迅全集』の出版をめぐる評価について」（『国際文化研究』一六号、二〇〇八）参照。
- 【6】 三石善吉「後藤朝太郎と井上紅梅」（竹内好他『近代日本と中国』朝日新聞社、一九七四）
- 【7】 周国偉「首版日文《魯迅全集》——魯迅与井上紅梅」『魯迅與日本友人』（上海書店、二〇〇六）七〇～七四頁参照。
- 【8】 符麗紅・三宝政美「井上紅梅和中国」（『国際経営・文化研究』五卷一号、二〇〇一）六三～八〇頁参照。
- 【9】 丸山昇「日本における魯迅」（伊藤虎丸他編『近代文学における中国と日本』汲古書院、一九八六）四三〇～四三一頁及び四三七頁を参照のこと。
- 【10】 武者小路実篤主編『大調和』（第七号、一九二七年一〇月）
- 【11】 松浦珪三「支那プロレタリア小説集（一編）」（白揚社、一九三一）
- 【12】 山上正義『中国小説集・阿Q正伝』（東京四六書院、一九三一）は「阿Q正伝」を翻訳する。なお山下訳は魯迅の監修が行われている。一九三一年三月三日山上正義宛魯迅書簡参照。山上正義については丸山昇『ある中国特派員——山上正義と魯迅』（田畑書店、一九九七）も参照のこと。魯迅書簡については特に指摘がない場合『魯迅全集（一六）』（学習研究社、一九八六）を典拠としている。以下同じ。
- 【13】 佐藤春夫「故郷（魯迅作）」（『中央公論』一九三二年一月号）
- 【14】 増田涉「家鴨の悲劇」（『古東多万』二号、一九三一）、同氏「風波」（『古東多万』別冊号、一九三二）
- 【15】 『魯迅全集（第一四巻・書信）』（人民文学出版社、二〇〇五）二三〇～三一頁参照。
- 【16】 増田涉『世界ユーモア全集（一二巻 支那篇）』（改造社、一九三三）
- 【17】 例えば日本の某新聞社が「世界の顔」という記事で魯迅批判を行ったが、魯迅は「作品を読んだ上の悪口ならかまわないが、僕の書いたものを直接読みもしないで、悪口を書いた——と云って彼はその支局長を怒っていた。……そういう場合、彼は感情を露骨にあらわした。一ぺんコイツは厭やだと思ったら、いつまでも頭にこびりついて抜けない、と別の場合に彼のそういった性格を語ったことがあるが、その時も私は彼の言葉を思い出

していた。愛憎の情がはげしかった。そういう点で、彼は所謂「清濁併せ呑む」という雅量や寛容をもたなかった。ケジメをはっきりさせて、自己の気持ちをごまかさなかった。のみならず露骨にあらわした。」増田渉『魯迅の印象』（大日本雄弁会講談社、一九四八）三七～三八頁参照。他にも類例で日本の学術雑誌『中国文学』で某学生が「魯迅は腹黒い」と批判を行った際にも露骨に不快感を表した事例がある。増田氏『魯迅の印象』三六～三七頁参照。

【18】「支那の高明という人が私の小説を翻訳したいといって来たので許してやり、序文を書いてやると、それを伝え聞いた魯迅は『高明という人はその名が体を表わさぬ人物だから佐藤氏は注意した方がよい』という意味の事を某氏への手紙に書いていた」佐藤春夫「魯迅の横顔—その生々しい警句」（『東京朝日新聞』一九三六年一〇月二〇日）参照。なお某氏の手紙とは一九三三年三月一日付増田渉宛の魯迅書簡を指す。

【19】例えば魯迅が改造社版『魯迅全集』を閲読した直後の書簡にも「井上紅梅氏からはその訳した拙作を一冊くれました」（三二年一二月一五日山本初枝宛書簡）とあるだけで、また三三年一月五日姚克宛書簡で魯迅が自身の外国語訳を紹介しているが、その筆頭に紅梅訳が紹介され「《小説全集》、日本有井上紅梅（K.Inoue）這日本姓的腊丁拼法、真特別、共有四个音、即 I-no-u-e 訳」と指摘するのみで、論評は一切加えていない。

【20】紅梅前掲書『魯迅全集』「特に訳者に与えた『阿Q正伝』中の賭博の解説図」参照。

【21】紅梅「魯迅年譜」（紅梅前掲書『魯迅全集』）五一二頁参照。

【22】一九三三年六月二二日魯迅日記参照。

【23】一九三三年六月二五日山本初枝宛魯迅書簡

【24】①「SHAW と SHAW を見に来た人々を見る記」（『改造』一九三三年四月号）②「火・王道・監獄」（『改造』一九三四年三月号）③「現代支那に於ける孔子様」（『改造』一九三五年六月号）④「ドストエーフスキイのこと」（『文芸』一九三六年二月号）⑤「私は人をだましたい」（『改造』一九三六年四月号）⑥「『中国傑作小説』序」（『改造』一九三六年六月号）

【25】竹内好「日記解説」（『魯迅全集（一九）』学習研究社、一九八六）二四四頁参照。

【26】伊藤漱平・中島利郎編『魯迅・増田渉師弟答問集』（汲古書院、一九八六）

【27】『魯迅の印象』には一九四八年版と一九五六年版、そして一九七〇年版の三種類がある。断り書きがない場合には一九四八年版を使用した。

【28】翻訳名義人佐藤春夫『平妖伝・世界大衆文学全集第二五巻』（改造社、一九二九）

【29】増田氏前掲書『魯迅の印象』一六頁参照。

【30】増田氏前掲書『魯迅の印象』五頁参照。

【31】増田氏前掲書『魯迅の印象』五頁参照。

【32】増田氏前掲書『魯迅の印象』七頁参照。

【33】前掲書『海を越えた友情』九頁によると一九三一年八月二〇日上海にて脱稿とある。

【34】「ろじん（魯迅）中国の小説家。一八八一年生まる。浙江省の人、小説壇の元老である。日本に留学し、仙台医学専門学校を途中でやめ帰国後、教員をやる傍ら文筆をとり、一種雄勁で精緻な文章で一家の風格をなし、「熱風」「野草」「彷徨」等の諸作は当時頗る好評を博したが、「阿Q正伝」を出すに及んで文名一時に喧伝さるるに至った」『改造』一九三二年四月特別号、改造社調査部編『最新世界人名辞典』（改造社、一九三二年四月）三九五頁参照。

【35】佐藤春夫『個人的』問題（『新潮』二九卷四号、一九三二）

【36】「文芸ノート」中の「ジャーナリズムに於ける創作の位置」、評者はXYZ氏（匿名）『新潮』（二八卷二号、一九三二）参照。

【37】魯迅への関心は以後も低調で、菊池寛『日本文学案内』（モダン日本社、一九三八）刊行に対して春夫は「世界各国の文学を説いて一言の支那文学に及ぶところのないのは聊かももの足りない。せめては白話小説運動やその成功の結果に現れた魯迅位は言うべきでなかったろうか。」と釘を刺している。佐藤春夫「新刊批評」（『新日本』一卷四号、一九三八）参照。

【38】三宝政美「佐藤春夫の隠れた功績」（『定本佐藤春夫全集（二九号）』月報一一、臨川書店、一九九九）。

【39】増田涉「魯迅伝」（『改造』一四卷四号、一九三二年四月）

【40】一九三二年一月五日増田涉宛魯迅書簡には「一月の改造には某伝が出なかった。豈文章の罪であるか？某君が突端の人物でないからです。……佐藤様（佐藤春夫）は『故郷』訳文の後記にも一生懸命に紹介しておりましたがどーなるでしょー」とあり、不掲載の原因は増田の「文章」ではなく、魯迅自身が著名人物ではないからと増田を擁護している。また一九三二年四月一三日内山完造宛書簡には魯迅の日本移住が話題になるが「佐藤先生も増田様も私の原稿のために大に奔走なさる」と、増田と春夫が魯迅のために身を粉にして奔走する筈と言及している。

【41】「家鴨の喜劇」『古東多万』（二号、一九三一年一一月）

【42】「風波」『古東多万』（別冊号、一九三二年九月）

【43】前掲『世界ユーモア全集（支那篇）』参照。

【44】一九三二年一〇月二日増田涉宛魯迅書簡参照。

【45】「シナ通」は中国語を解し中国社会に精通した中国愛好者を指し、大正時代から昭

和戦前期に活躍したが、その視野の狭さから趣味人の範疇から脱却できず「安易な中国紹介のゆえに、のちのちまで軽蔑のマナコで見られるようになった」（三石氏「後藤朝太郎と井上紅梅」）という見解が一般化した。

- 【46】三石氏「後藤朝太郎と井上紅梅」三九頁参照。
- 【47】支那風俗研究會『支那風俗』（一卷一号～四卷一号、一九一八～二二）
- 【48】井上紅梅『支那女研究香艷録』（支那風俗研究会、一九二一）
- 【49】井上紅梅『匪徒（土匪研究）』（日本堂書店、一九二三）
- 【50】井上紅梅『支那各地風俗叢談』（日本堂書店、一九二四）
- 【51】井上紅梅『中華万華鏡』（改造社、一九三八）
- 【52】「支那料理の見方（東亜研究講座一四輯）」（東亜研究会、一九二七）、「支那人の金銭慾（東亜研究講座一五輯）」（同右、一九二七）、「支那人の迷信」（同右、一九二九）
- 【53】『アジア問題講座（九巻 社会・習俗篇）』（創元社、一九四〇）
- 【54】井上紅梅「支那の旧口語小説——胡適氏の「五十年来之中国文学」摘訳」（『日刊支那事情』一九二六年九月一八日～一〇月一日）
- 【55】井上紅梅「譚正璧の見た支那の現代文学」（『日刊支那事情』一九二六年一〇月二日～一二日）
- 【56】井上紅梅「支那の家庭を説く」（『中央公論』（昭和二年六月号）、「支那の大衆文学」（『中央公論』昭和三年三月特別号）。改造社については「上海騒擾記」（『改造』九巻五号、一九二七）、「ショウ翁と孫文未亡人」（同一五巻四号、一九三三）、「上海藍衣社のテロ事件」（同一五巻八号、一九三三）、「了解的周作人（听周作人所談）」（『文芸』二巻九号、一九三四）。随筆掲載は多数にのぼるため号数のみ掲示すると、『改造』八巻八号、一五巻四号、一五巻九号。『文芸』二巻三号、二巻五号、二巻九号。
- 【57】拙稿「支那に浸る人——井上紅梅が描いた日中文化交流」（『から船往来——東アジア海域社会と日本文化の形成』中国書店、二〇〇九）参照。
- 【58】井上紅梅「支那の新文芸——張資平氏作『寒流』」（『日刊支那事情』一九二六年五月一八日）
- 【59】井上紅梅「魯迅年譜」（『魯迅全集』改造社、一九三二）五一頁参照。
- 【60】「増田先生のすばらしかった点は、……人徳を完璧に備えていたことで、現在でも増田先生の人徳について「神様のような人だった」と断言される著名な学者もいるほどである。」中島利郎「関西大学時代の増田渉先生」前掲『海を越えた友情』六六頁参照。
- 【61】増田氏前掲書『魯迅の印象』二五二頁参照。
- 【62】「私個人としては、私がいままでに接したどんな人——むろん日本人も入れてだが、

どんな人よりも人間的に魯迅を最も尊敬し、親愛を感じている」増田氏前掲書『魯迅の印象』一七頁参照。

【63】松枝茂夫「増田涉さんの思い出あれこれ」(『文学』四五巻五号、岩波書店、一九七七) 五四九頁参照。

【64】「明日は帰るからと挨拶に行ったら、数々の土産物が用意してあって、奥さんの景宋夫人がそれを包装してくれるのだったが、彼は奥さんの包み方がまずいと云って、自分がそれを引たくるようにして、好々的に包み直してくれるのだった。私は何とも云えない有り難い温いものにふれた気持ちで、黙って横から、実はあまり巧くもない彼の手つきを見ていた」増田氏前掲書『魯迅の印象』三二頁参照。

【65】増田は『大魯迅全集』編纂時に出版責任者として一時に改造社社員となった経緯を除けば、興亜省就任(一九三九年五月)まで約七年間相応の職を得ていない。

【66】「これが日本の雑誌に出たときは、「隣の麦飯はうまい」というやつだろうと匿名評者は片づけてくれた」増田氏前掲書『魯迅の印象』一五頁参照。

【67】佐藤春夫「魯迅の横顔—その生々しい警句」(『東京朝日新聞』一九三六年一〇月二〇日) 参照。

【68】「原稿紙一枚は一円にもならない」(一九三三年三月一日山本初枝宛書簡)「増田君も随分無駄骨折をしたと思う」(一九三三年四月一日山本初枝宛書簡)

【69】「増田一世は不相変『小説史略』をコツコツ訳して居ます、時々解らない処を聞きに来ますがもし出版する本屋がなければ実に気の毒です。出版のために有益であるならば私は序文を書いてもよいと思います」一九三四年一月二七日山本初枝宛魯迅書簡参照。

【70】島木健作「『大魯迅全集』を読む」(『改造』一九巻春季特大号、一九三七) 一八四～五頁参照。

【71】井上紅梅・松枝茂夫・山上正義・増田涉・佐藤春夫訳『大魯迅全集』(改造社、一九三七) 参照。

【72】増田涉「魯迅書簡集」(『改造』一八巻一二号、一九三六) 参照。

【73】紅梅没後も、魯迅の日本人宛の書簡を集成した『魯迅書簡補遺(致日本人部分)』(一九五二)や、『魯迅の印象(再版)』(一九五六)、『魯迅選集(改訂版)』(岩波書店、一九六四)でも継続して削除されている

【74】削除箇所が復元されたのは増田涉『魯迅の印象』(角川書店、一九七〇)からで、『魯迅全集』(人民文学出版、一九八一)にも反映されている。

【75】書簡中の作者が本当に「魯迅」なのかも疑わしい。書簡はその後増田発表の『魯迅

伝』が紅梅の『魯迅全集』の広告になってしまった皮肉を嘆くが、その文脈中に広告中に魯迅が必要以上にえらく書かれている点を慨嘆するという一節が唐突に挿入されている感否めない。元来増田や春夫は日本における魯迅の紹介に努力し、その行為に感謝を示していた魯迅が（紅梅に慨嘆するのはともかく）自らの広告文に慨嘆するのは些か矛盾を感じない訳でもない。

【76】佐藤春夫「曾遊南京」（『改造』一九卷一三号、一九三七）

【77】また一九二一年に芥川龍之介が上海を周遊した際、現地の最適な情報源として紅梅の『支那風俗』に言及している。芥川龍之介「上海游記」（大阪毎日新聞、一九二一年八月～九月）参照。